もう一つの「ろーぷれわーるど」

ごましお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう一つの「ろーぷれわーるど」

【Ｎコード】
Ｎ２７５７Ｚ

【作者名】
ごましお

【あらすじ】
ごく普通の高校生、鏑正人は、
ゲーム「ギャスパルクの復活」をプレイしていた時に
いきなりゲームの中の世界「エターナル」に引き込まれてしまう！
正人は自分のもといた世界へ戻るため、
使い込んだキャラを使って、冒険する！

作者初執筆なので不満なところだらけだとは
思いますが、温かい目で見ていただけたら幸いです。

ＳＣＥＮＥ１　そんな簡単に信じられるはずがないだろ？！ゲームの世界だなん

作者初の試みです。
気軽に感想をどうぞ。

SCENE1　そんな簡単に信じられるはずがないだろ?!ゲームの世界だなん

視界の一面を埋め尽くしていた光がだんだんと弱まり、
やっと視力が戻ってきた。
体を支配していた浮遊感から一転、どこかへ降り立ったような感覚に襲われる。
たまらず俺は尻餅をつき、そこでやっと状況把握できる状態になった。

「ってぇ・・・ここはどこだ??」

俺は自分の部屋で新しく発売されたゲーム「ギャスパルクの復活」をやっていたはずだ。
それがなんで今こんな大自然にかこまれたフィールドみたいな所にいるんだ??

「夢・・・じゃねえよなあ・・・マジでどこだよここ・・・」

どこを見ても人の気配がない・・・。
それにさっきは夜だったはずだ。なんで太陽が真上にあるんだ?

「ギギギギギギ・・・・」
「?!」

あっぶねえ・・・
なんだこいつは!?
俺の眼の前にある物体?はとてもじゃないが人間とは思えない。
強いて言うなら・・・バッタ?
良く見てみるとそのバッタらしき物の上になにかが表示されてる。

「＜トノサマバッタ＞だ？」

嘘こけ！
日本のトノサマバッタはこんなでかくないし、
襲ってこねえよ！
ってあれ・・・？こんなセリフ俺家でも言ってたような・・・

「うおっ！」

威嚇をしてたと思ったら襲い掛かってきやがった！

「ちょっと待て、なんで襲って・・・ギャアアア！」

右腕のあたりに痛みが走る・・・と思ったが全然痛くねえ？
どーゆーこった？？
なんて不思議に思う暇もねえ！
またきやがった！

「ファイアーボール！」

俺の後ろから声がしたかと思うと、いきなり火の玉が飛んできた。
え？どゆこと？火の玉？

「ギギギギギガアアアアアア！」

その火の玉がバッタに当たるとバッタは苦しそうなうめき声を上げて
消えた。消えた？いや、なんか金色のコインが出てきたけど・・・
バッタは消えた。

「大丈夫かい？」

俺に声をかけてくれたのは日本ではありえない格好をした騎士？のような人だった。さっきのバッタと同じように頭の上に名前？が書いてあったゲームみてえだな・・・名前はクリフというらしい。

「ええ～っと・・・はい大丈夫ですスイマセン。」

「大丈夫ならいいのだが・・・君見慣れない格好をしているね？」

あんたのほうがよっぽど見慣れないわ！！

とは思ったもののそんな発言をするわけにもいかないので、

とりあえず聞いておけることは聞いておく。

「あなたは・・どちら様ですか？それよりここはどこですか？？」

「私は王都ガライアの守護兵でクリフと言う者だ。君は・・・マサトというのか？

どこから来たんだい？」

今どこって言った？王都ガライア？それって・・・

「え～っと僕は・・・ってなんで俺の名前知ってるんですか！？」

今あっさりスルーしちゃいそうになったけど、

この人俺の名前知ってたぞ？！

「知ってるもなにも・・・君の上にある名前を読ませてもらっただけだが・・・」

「え？」

俺の上の名前？
おそるおそる自分の頭の上を見てみると・・・

「な、なんじゃこりゃあ？！」

俺の上には「マサト」という名前表記の下に青いバーが書かれている。
マジでゲームみたいだぞ・・・

「なにやら困惑してるようだな・・・とにかく一回ガライアに来るといい
付いてきなさい」

その後クリフについて草原を歩いた。
そこからは特に変なのも出くわさず歩いていけたのだが・・・。
俺はそんなこと考えてる余裕も無いくらい、焦っていた。
さっき出くわしたバッタといい、この騎士のような人といい、
自分の上にのっかってるバーといい・・・
それらの情報から出てくることなど一つしかない。
＜ここはゲームの世界ではないか？しかも俺がやっていたゲーム、
ギャスパルクの復活ではないか？＞
と俺は本格的に考え始めていた。

@

「うわあ・・・」

色々考え事をしているうちに街についた。
並んだ商店からは客の呼び込みの声が絶え間なく聞こえ続け、
街の喧騒はこの街がどれだけ活気があるかを表していた。

「ようこそ、王都ガライアへ」

俺の隣を馬に乗って歩いていたクリフからまた「王都ガライア」という
言葉が聞こえた。
やっぱりさっきも聞き間違えじゃなかったんだ。
王都ガライア・・・・。

「やっぱり・・・ここはゲーム「ギャスパルクの復活」の中だ・・・」
「ん？なにか言ったか？」
「いやなんでもないです！」

クリフは不思議なものを見る顔をしていたが
俺としてはそんなことは考えていられない。
なにせ、ここがゲームの中だというのだから、考えることが無いほうがおかしい。
なんで俺はゲームの世界に入れられたんだ？
なんのために？
ここがゲームの中ということはさっき俺が襲われたバッタは、
魔物（モンスター）で、このクリフが放った火の玉は魔法ということなのだ。
日本の常識じゃあありえないことだったが、ゲームの中だといわれたら納得できる。

じゃあ俺はどーゆー扱いなんだ？
レベルも無いような商人なのか？
それとも俺が使い込んでいたキャラそのままなのか？
ギャスパルクの復活の中じゃ俺は、俺の使っていたキャラはそこそこレベルが上がっていたはずだ。
せめてステータスウィンドウ「パッ」さえ見れれば・・・

「おい、マサト、ステータスウィンドウなんて道で開けるもんじゃ・・・」

え？なんのこっちゃ？クリフが俺の隣をみて固まっている。
隣？

「うおっ？！」

俺の隣にはゲーム「ギャスパルの復活」で何度も見たステータスウィンドウが開かれていた！
なになに・・・
どうやら見たところ俺がつかいこんでいたキャラをそのまま俺が受け継いでいるようだ。
ってことは、技とか使えんのかな？・・・

「マサト・・・君はいったい何者？・・・・」

やっと体の硬直が解けたクリフが訝しげな目で俺を見てきた。

「え？ああ～すいません！今閉じます！」

そう言って俺が隣を見るとそこにはもうステータスウィンドウは無かった。

もう一度クリフの方を見るとなにやら考えている表情をしたあと・・・

「マサト・・・君をここの王、ガルガンシア王陛下に会わせたいのだが・・・いいかね？」

などと言ってきた。

え？王？陛下？

「えええええええ？！」

この時からもう、冒険は始まっていた。

ＳＣＥＮＥ１　そんな簡単に信じられるはずがないだろ?!ゲームの世界だなん

改めて読んでみると・・・とんでもない駄文ですねｗ
感想をいただけたら幸いです。

SCENE1－2　出会い（前書き）

連続投稿です。

SCENE1－2　出会い

ゲームの世界に来た。来てしまったという事実をつきつけられた翌日。

俺は王都ガライアの城の一つの部屋にいる。クリフに言われて昨日はここで一泊した。

まあ、こっちの世界では俺の家なんぞあるわけもないし、助かるのだが。

野宿なんて無理だって・・・。

一日して分かったことがいくつかある。

まず、なぜ俺がここに呼ばれて王様なんかと会わなくちゃいけなくなったのか。

それはクリフから言うと俺のレベルが桁外れで高いらしいのだ。

日本のゲーマーからしてみれば普通のレベルだと思うのだが、

こっちの世界だと、とんでもなく高レベルらしい。

次に、俺はステータスこそゲームのものを受け継いでいるが、

持ち物は受け継いでいないようだということ。

俺はこっちに来ても学生服のままだし、

荷物も、なにか入ってそうな袋すら見当たらない。

もちろん武器も持っておらず、ろくな装備ではなかった。

でも元からの防御力が高いため、昨日のバッタからの攻撃も

たいしたダメージにならなかったのだろう。
昨日でくわした、＜トノサマバッタ＞はそーとーなザコキャラだったので、ということもあるだろうが。
程なくして、クリフがやってきた。
「起きてるかい？マサト」
「ああ、いくらなんでもこんな時間まで寝てねーよ」
時刻はもう昼過ぎ。
クリフは昨日と同じ騎士のような格好・・・いや、騎士だからいいんだけど。
をしていた。
昨日は鉄仮面をしていて、顔が一部しか見れなかったが
それがなくなっていて、青年的顔立ちをしているのが分かる。
イケメンだこんちきしょう。
「王陛下との謁見の時間がとれた。あと1時間といったところだな。」
「それはいいんだけどさ、俺ってこの格好でいいわけ？」
俺は昨日と同じ学生服だった。
こんなことを言っておいてなんだが、俺は他に服を持っていない。
まあ、荷物が無いんだから当然なのだが。
「ああ、大丈夫だろう。良いとは思わないが、他に服を持っているわけではないんだろう？」
「ああ、生憎な。」
昨日、クリフには少し話をしてある。

とはいっても別にここがゲームの中だとかいう話はしていないが、
自分がなにも持っていないことや、
ちょっと違うところから来たことなどだ。
最初は驚いていたけど、俺の格好を見て
納得してくれたらしい。

「にしても、すごいな俺なんか身元のわからない奴に王様自ら会ってくれるのか？」
「ああ、前もって君のステータスの話はしてあるからな」

あ～・・・なるほどね。

「それと、謁見までの時間なら外に出てもいいそうだから、
好きに街を見てきてくれてかまわないぞ」
「おお～・・・って言っても金持ってないんだが・・・」
「大丈夫だ。見てくるだけだから」

・・・買えないんかい・・・

@

朝食は城のほうで食べさせてもらったので
腹ペコではない。腹ペコではないのだが・・・・

「うわあ！めっちゃうまそーーーー！！！」

商店街に並ぶ数々の飲食店から良いにおいがしてきてたまらない。
食べ物は日本とは違うようで、最初は抵抗があったが
意外と慣れてきて逆に美味しいと思う食べ物も増えてきた。

「くっそう・・・金ないんじゃなにも食べられないじゃないか・・・・
」

学生時代にも金欠状況という状況には何度も味わったが、
今回のこれはそれ以上だ・・・
なにせ金が全く無いのだから。
この状況をどうにかできないものか・・・

その時俺に一つのアイディアが浮かんだ

「ハッ？！・・・なら稼げばいいじゃないか！！」

@

クリフは外に出て良いと行ったのだ。
別にフィールドに出ちゃ悪いとは言ってないので大丈夫だろう。
ということで俺は沼地のフィールドに来ている。

金を稼ぎに！！

「ウリャリャリャリャリャリャ！！！」

出てきたモンスターを片っ端から倒して行く。素手で。
だってしょうがないだろう？！武器買うような金はないのだから！
ってかその金を稼ぎにきてるのだから！

このへんのモンスターは＜ポイズンスラッグ＞と言って、
ベトベトの粘液をまとったナメクジのようなモンスターだ。
確かゲームの中ではたいしたレベルじゃなかったはずだ。
といっても、特殊攻撃として、麻痺毒とダメージ毒を食らわせてくるので
油断してるとまずい。

俺は自慢のＡＧＩ（アジリティ）で素早く魔物の後ろに周りこみ、
一匹ずつ殴って倒していった。
＜ポイズンスラッグ＞は動きがのろいので、
後ろに周りこむことは案外簡単だった。
さっきっから、手が粘液でベトベトになってるのは頂けないけどね・

・・
ネトネトして気持ち悪いったらありゃしない。
「うらあ！」
一発拳を入れると＜ポイズンスラッグ＞のＨＰバーが瞬く間に真っ白になり
うめき声を上げて液状になっていく・・・って
「おいおい・・・金が粘液まみれって・・・マジで勘弁してよ・・・」
そんなところにリアリティ求めてねえよ！！
@
２０分ぐらい経っただろうか、
周りにポイズンスラッグはいなくなっていた。

「けっこうたまったなあ俺のG！」

この世界の金の単位はGと言うらしく、ごく普通のコインだ。
日本円でどれぐらいの価値があるのかは分からないが・・・

「キャアアアアアアアアーーー！！」

「？！」

なんだ！？今のは？！
聞いたところ人間の・・・女性っぽかったぞ？
とりあえず今の悲鳴はヤバいんじゃないか？！
悲鳴がしたほうは・・・・あっちか！
急いでいかないと！！

@

「大丈夫か？！」

悲鳴がしたほうを目指して走っていくとそこには尻餅をついている
一人の女・・の子？と・・・

「＜オールドスラッグ＞・・・」

そこにはさっきまでの＜ポイズンスラッグ＞とは比にならないほどの巨大な
ナメクジが少女に迫っていた。
頭上に表示されるモンスター名は、＜オールドスラッグ＞
この地帯に稀にでるボスモンスターだ。
動きは遅いものの、強酸、猛毒の広範囲攻撃があり、
なめてかかると全滅の恐れがあるモンスターだ。

「大丈夫か？！ほら立って！」
「ア・・・アア・・」

少女はこの巨大なモンスターを見て腰を抜かしてしまっているようだった。
このままここにいたら、狙われちまう！

「ちょっと失礼する！」

そう言うが早いか俺は少女をお姫様抱っこ？し、
少し後方まで逃げてそっと少女を降ろした。

「これで一安心・・・なわけないか」

後ろを見るとすでに＜オールドスラッグ＞が追ってきていた。
正直ここまでデカい相手に素手で戦える気はしない。

「使える魔法あったっけなあ・・・」

俺は魔法使い職ではないが、ちょっとだけ攻撃魔法を覚えている。
といってもそこまでの威力はないんだけど・・・

「もうしょうがねえ！＜エアブラスター＞！！！」

＜エアブラスター＞は風属性の単体攻撃魔法で、
レベルは中級と言ったところか・・・俺の中では最強魔法なんだけどね・・・
ああ・・・ＭＰ（マジックポイント）めっちゃ減った・・・

俺がそう叫ぶと俺の手から緑色の刃のようなものが二つ出てきて、
＜オールドスラッグ＞を切り裂く！　おおコレカッコイイな・・・

「ギガガガガガ・・・」

避ける事ができずにモロに魔法を受けた＜オールドスラッグ＞は
呻き声を上げて液状になっていった・・・
正直、魔法に自信はなかったのだが、俺自身のレベルが高かったので
どうにかなったようだ。

いつもどうり粘液まみれのＧを回収して・・・
とりあえずさっきの女の子のとこ行くか・・・

「あ・・あの・・」
「あれ？」

今行こうとしてたのに、むこうのほうから

来てくれたみたいだ。表示されている名前は・・・・・・シオリ
日本名だなこれは・・・いや、そう断定するのは早い気がするけど
そんな気がする。黒髪黒瞳だし。
この世界では黒髪黒瞳は珍しいと言っていいだろう。
ほとんどの人がいろんな色の髪をしている。

「た、助けてくださって・・・あ、ありがとうございました」

シオリは蚊の鳴くような小さな声で喋った。
容姿は肩にかかるぐらいの髪で黒髪黒瞳、
髪には小さめの細い紐のリボンが二つ、それぞれ正面から見て端っこについていた。

「いや、大丈夫だよ、そっちこそ大丈夫？怪我はない？」

見たところＨＰバーは減っておらず、どうやら＜オールドスラッグ＞のデカさ
と気持ち悪さに腰を抜かしてしまったのだろう。

「だ、大丈夫です・・・」

うん、一言で言うなら「美少女」だ。
普通に可愛いぞこの子！

「ところで・・・君はここでなにをしていたの？
名前が特徴的だけど・・・もしかして日本から来たりしてない？」

俺の「日本」という単語にピクン！とシオリの肩が動いた。
こりゃあどうやら日本人で間違いないみたいだな・・・
格好はこの世界の人たちとなんら変わりなかったので最初は気付か

なかったが
むこうは俺の着ている学生服で気付いていただろう。

「マ、マサトさんも日本から来たのですか？」

「そうだよ、俺は日本では高校1年生だった。君は・・・シオリちゃんでいいのかな？
どうしてこの世界に？」

俺がこのことを聞いたのには訳がある。
俺のほかにもこっちの世界にきたやつがいるなら、
俺と同じように訳もわからず来たやつばかりだろう。
でもこの子に聞いたのはそういう意味じゃない。

もともと、このゲームを少女がやっているなんてこと自体が珍しいのだ。
もしかしたら趣味なのかもしれないけど、喋っている雰囲気からしてそうでは無い気がする。勘だけど・・・

「わ、わたしは・・・あ、兄がこのゲームをやっていて、
そのデータの一つに私も入れてもらってやっていたのです。
わ、私がやることはあまりありませんでしたが、
あ、兄が私のも使って2つ同時にやっていました。」

へえ・・・
でもそれじゃあなんでこの子がこっちの世界に来たんだ？・・・

「それで訳もわからずこっちの世界にいきなり？」

俺の質問にシオリちゃんは少し寂しげな表情をしたあと、

「わ、私の兄が、ゆ、行方不明に・・・なったんです。
そ、それで兄の部屋で付いていたこのゲームを、
わ、私が私のデータを使って少し動かしてみたのですが・・・」

そこまで言うと、シオリはそのまま俯いてしまった。
まあ、多分そしたら引き込まれたのだろう。

「大体分かったよ。・・・で、シオリちゃんはこれからどうするの？」

俺としてはもう少し話しがしたい。なにせ、こっちの世界で会った初めての
日本人なのだから。
正直俺は俺以外にこっちの世界に来てる人はいないんじゃないかとも思っていた。だからこれは大きな出来事だし、色々な情報が手に入るかもしれない。

「そ、そのことについてなんですけど・・・」

「ん？」

シオリは俯いたまま続けた。

「ず、図々しいとは思いますが・・・マ、マサトさんについていかせてもらっては・・・だ、ダメでしょうか？」

こんな女の子に「ダメでしょうか？」なんて言われて「ダメ」なんて言える高校生がいたら見て見たいわ。
そいつは絶対男じゃねえ。

「いいよ！俺もそうしようかと思ってたし。」

俺がそういうとシオリはパアーッと明るくなってこちらを見てきた。本当に美少女だこりゃ

「じゃあ俺の本当の名前を教えておくね。俺は鏑正人(かぶらまさと)だ」

「わ、私は、は、春風汐理(はるかぜしおり)と言います。よ、よろしくお願いします！」

なにはともあれ、これで仲間が増えた・・・のかな？

「・・ってヤベっ！あと15分じゃん！汐理！急いでガライアまで行くぞ！」

「が、ガライアですか？」

「そう！王様と謁見するらしい！」

「へ？」

二人でガライアまでの道を急いだ。

ＳＣＥＮＥ１－２　出会い（後書き）

オリキャラです。
ユーゴたちはもう少し先になりそうです。
次会エル登場の予定です！

ＳＣＥＮＥ１－３　登場人物のステータス（前書き）

非公開だった正人のクラスなどを公開します！

SCENE1ー3　登場人物のステータス

～鏑正人（かぶらまさと）～

Class　ファドラガンナー

LV　71

HP　621／621

MP　309／309

AGE　15

SEX　男性

RACE　人間

STR　443

VIT　312

DEX　781

AGI　746

INT　202

WIS　179

LUK　168

ー備考ー

正人のクラス「ファドラガンナー」とはその名の通り風神ファドラの加護を得た銃使い（ガンナー）のこと。
風属性魔法なら少し使える。
主武器は銃で、弓矢も使える。
ＤＥＸとＡＧＩが高い。

～春風汐理（はるかぜしおり）～

Ｃｌａｓｓ　トラップチーフ
ＬＶ　５２
ＨＰ　５１１／５１１
ＭＰ　６２８／６２８
ＡＧＥ　１１
ＳＥＸ　女性
ＲＡＣＥ　人間
ＳＴＲ　１８７
ＶＩＴ　１９０
ＤＥＸ　６５８
ＡＧＩ　４２３

INT　141
WIS　691
LUK　322

ー備考ー

汐理のクラス「トラップチーフ」とは盗賊(チーフ)の派生系で、
確率魔法に分類される、罠魔法(トラップ)を得意とするクラス。
それ以外の魔法も状態異常回復魔法なら使える。
主武器はダガーで軽い剣なら扱える。

SCENE1ー3　登場人物のステータス（後書き）

オリキャラを出す事があったらこのように
ステータスを紹介していきたいと思います！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2757z/

もう一つの「ろーぷれわーるど」

2011年12月10日01時51分発行